

複式学級における音楽科指導の課題解消への実践研究

—反転学習と類似教材での共通導入・共通終末の設定について—

山口 亮介（長崎大学教育学部附属小学校）

1 問題の所在と研究の目的

文部科学省(2017)の学校基本調査によると、全国の小学校には、複式学級が4,602学級あり、全学級数272,950に対して、1.69%が複式学級であることが分かる。都道府県によって複式学級数にも差があり、北海道(655学級)、鹿児島県(521学級)、福島県(201学級)であることに對し、東京都(4学級)、奈良県(5学級)、香川県(9学級)であることから、複式学級の認知度や教師の指導経験においても差があると考えられる。

筆者の居住している長崎県は、小学校における複式学級が174学級あり、全学級数3500に対して、4.97%と全国の割合よりも高く、都道府県における複式学級数は6位である。また、長崎県基本調査(2017)「小学校別学級数及び児童数」によると、長崎県内の全小学校数338校に對し複式学級がある学校は80校あり、長崎県内の約4分の1の小学校は複式学級を有しており、市町によっては、複式学級がある学校数が過半数を超えている地域もある。このような長崎県の実態を踏まえ、勤務校では平成16年より複式学級を設置し、県内の複式学級を有する学校に出張授業や講話を行うなどの取組を行ってきた。筆者は勤務校において、平成22年度に1・2年生、平成25年度に3・4年生(複式主任)、平成27年度に1・2年生(複式主任)の学級担任を行い、平成29年度は音楽専科として、3・4年生及び5・6年生の2学級を担当した。本校の音楽科指導においては、2学年を同内容で指導を行う年度方式¹を行っていたが、県内の公立小学校の実態を踏まえ平成28年度より学年別指導²へ移行した。

複式学級の音楽科における書籍や資料及び実践例は少なく、これまでに文部省(1982,1995)は、『小学校複式学級指導資料音楽編』において、複式学級での音楽科指導について述べているが、2学年を同内容の指導を行う年度方式による指導計画についての記載であることが特徴としてあげられる。その後、文部省及び文部科学省による音楽科教育における複式指導資料は確認できないが、複式学級を有する複数の自治体の教育委員会などから、指導資料として発行されているものがある。

公立学校の音楽科指導においては、年度方式を採用している学校と学年別授業を採用している学校がある。前田晶子(2016)の調査から、鹿児島県内の複式学級がある小学校では、音楽科において学年別指導をしている学校は13校(8%)であることから、年度方式を採用し

¹ 3・4年生の複式学級の場合、例えば学級全員でA年度は3年生のカリキュラムを実施し、B年度は4年生のカリキュラムを実施するという指導方式。

² 一つの教室にいる2学年の児童生徒に對して学年ごとの教科書、あるいは指導事項に沿った教材を指導する指導方式。本論文では、異教科の組み合わせではなく、同教科異内容指導のものとして以下記述していく。

ている学校が多いことが分かる。学年別指導を行っている理由として、「本校は山村留学生³を受け入れているため、A・B年度編成が組めない(p.315)。」という指摘が挙げられている。

筆者は、年度別指導に対応した『複式学級対応年間指導計画資料』を作成し、平成22年～27年まで教育芸術社のホームページに掲載している。このように、複式学級の音楽科指導においての事例は、年度方式を採用した実践は見られるものの、学年別指導についての事例は筆者の調べる限りでは見つからなかった。

筆者は、勤務校において音楽科の学年別指導を行うにあたって、主に以下の3点について困難さを感じるがあった。

- 1) 同じ教室内に異なる音楽があることで生じる困難さ
- 2) 教師がついていない時間における「ずらし⁴」と「わたり⁵」の困難さ
- 3) 授業を円滑に進めるためのカリキュラム作成に関わる困難さ

これらを解決することは、複式学級における学年別指導を行う際に共通する課題であると考えた。そこで、本研究の目的を、音楽科における複式学級の学年別指導の課題を明らかにし、その課題を解消する学年別指導の授業デザインを提案し、検証及び考察することとした。

2 複式学級における音楽科指導の課題

本研究の実践にあたり、複式学級を有し、音楽科における学年別指導を行っている長崎県内A小学校で音楽指導を行っているT1教諭（複式指導経験6年・音楽指導経験27年）及びT2教諭（複式指導1年・音楽指導経験6年）に複式学級における音楽科指導のよさや課題についてインタビューを行った。

T1教諭は、1つの学級に2つの音楽が同時進行することの難しさや、下学年が上学年の学習内容を先に知ってしまうことに課題を感じていた。また、学年の人数が少ないと合奏や合唱の授業が困難となるため、5年生が6年生の演奏に入ったりその逆を行ったりするなど、2学年の学習内容をどのように行うかについてのカリキュラムを再構成する難しさがあるとの指摘があった。

T2教諭は、上学年から下学年の関わりがあるとことに複式学級の音楽指導のよさを感じていた。一方、課題として筆者同様に器楽の活動の際に生じる指導上の困難さを感じており、指導内容によっては音楽室と隣の教室とに学年を分けて授業を行ったことを挙げた。また、鑑賞の活動時にしっかりと視聴をするために一方の学年が視聴している時は活動を停止し、静かにする時間を設定していることを挙げるなど、「ずらし」や「わたり」につながる学年別指導の問題点を確認することができた。

筆者は、これまでに複式学級における自らの年度別指導及び学年別指導の経験と、実際に公立学校で学年別指導を行っている教諭へのインタビューから、それぞれの指導方法のよさ

³ 小・中学生が一定期間親元を離れ、山村の留学センターや里親家庭で生活しながら現地の学校で学ぶこと。

⁴ 両学年の学習指導を直接指導と間接指導に分け、それらをずらすことで教師が必要な場面で直接指導することができるようにすること。

⁵ ずらしを行うことで、直接指導を行うためにそれぞれの学年を行き来することができる教師の動きのこと。

と同時にそれぞれの課題を以下（表 1）のように考えた。

	学年別指導	年度別指導
長所	<ul style="list-style-type: none"> ○ それぞれの学年の教科書を用いて指導 ○ 他校とのカリキュラムのずれはほとんどない 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 単式学級での音楽科の指導と同様 ○ 上級生から下級生への教えあいが可能
短所(課題)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師の複式学級における指導技能が必要 ○ 学年の人数が1から数名の場合指導困難 ○ 同教室で異なる分野の指導が困難 (器楽・歌唱の組み合わせは不可) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教師はカリキュラムを再編する力が必要 (上学年カリキュラムが困難、初めて経験する楽器の導入など) ○ 教科書の内容や共通教材について転出した場合、教えていない指導内容が出てくる。(共通教材の未習問題)

表 1 筆者の実践を基にした複式学級の音楽科指導における課題

以上の内容により、公立学校において学年別指導を行っている教師の課題として、同じ教室で異なる音楽活動を行う際に生じる問題と、カリキュラムに記載されている題材や教材を、どのように組み合わせるかについての問題が生じていると考えた。

3 先行研究

複式学級における音楽科指導として、文部省(1982)は、「一つの音楽室の中で学習している児童たちに異なる二つの音楽を同時に表現させることはできない。それゆえ、複式学級の音楽指導においては、同教材・同題材による学習をたてまえとするのがよい。(p. 17)」「複式学級の音楽指導においては、年間指導計画の中でA年度・B年度の題材・教材の組み方の工夫が重要な意味を持ってくる(p. 17)」と述べている。

同様に、文部省(1995)は、「複式学級の特質や課題などを十分考慮し、子供たちの立場に立って適切な年間指導計画を作成し、A・B両年度に関連した題材や教材について、その発展性と統一性という点からきめ細やかな配慮を行うことが大切となる。(p. 23)」と述べている。以上に述べたそれぞれの『小学校複式学級指導資料音楽編』は、年度別指導についての記載であり、学年別指導についての記載は見られなかった。

岩手県教育委員会(2006)による『岩手の小規模・複式指導ハンドブック-生活・音楽・図工・家庭・体育-』では、年間や題材の指導計画作成、評価についての記載があり、「2学年同じ目標を設定」とし、同じ教材を用いながら指導計画を作成しているが、「技能面の目標の場合、学年差を考慮し、学年ごとに設定することが望ましい」としている。評価についても同様である。また、変則複式⁶の指導については、「似ている題材で計画を立てる」ことが指摘されている。

青森県教育委員会義務教育課(2009)『へき地・複式教育ハンドブック(一般編)』では、「類似内容の教材や指導内容の近い教材を組み合わせ、次年度を見通した年間指導計画を作成する。」「時間毎の目標は2個学年同じ内容でもよいが、楽器の演奏等技能面の目標は、学年毎の設定をすることが大切である。」としている。

また、岩手県立総合教育センター(2016)『複式学級の特質を生かした学習指導の進め方』

⁶ 低・中・高のいずれかの学年をまたぐ、または、欠学年や単式学級があるために低と高などの編成による複式学級。

イド』では、国語科や算数科における両学年の単元が類似している内容の指導の際に、表2に示す「共通導入・共通終末」を設定した指導モデルの説明と実践例が掲載されている(p.17)。岩手大学教育学部附属小学校(2014)では、学校公開研究発表会において、国語科及び算数科の授業において、「共通導入・共通終末」を設定した授業を行っている。

下学年段階	指導形態(わたり)		上学年段階
導 入	同時直接指導A		導 入
①展 開	直接指導	間接指導	①展 開
②展 開	間接指導	直接指導	②展 開
	直接指導	間接指導	
終 末	同時直接指導B		終 末

表2 「共通導入・共通終末」の指導モデル

これらを踏まえ、筆者は、学年別指導においても学習が成立しやすい条件を整えるために、同題材及び類似教材による「共通導入・共通終末」を設定した指導モデルを音楽科の学年別指導において実践することが、先に述べた課題の解決につながるのではないかと考えた。

4 仮説の生成

以上の課題や先行研究を踏まえ、複式学級において音楽科の学年別指導を行う際に次の5点の留意点が必要であると考えた。

- 1) 両学年共通の題材を設定し、可能な限り類似した教材で指導を行うこと。
- 2) 共通の目当てを設定するが、学習のねらいや内容、評価は一部学年の実態に合わせて設定すること。
- 3) 異学年との交流の場を設定すること。
- 4) 授業内での児童の活動時間や教師の直接指導の時間を確保するために、反転学習を行うこと。
- 5) 「ずらし」と「わたり」を可能な限り解消するために、「共通導入・共通終末」を設定すること。

以上の内容から、今回は複式学級の学年別指導における授業デザインの効果を検証するために、4)、5)の内容について焦点化した仮説を生成した。

4.1 仮説1 反転学習の設定が、複式学級の児童の学習の進捗に有効に機能するのではないか。

小学校音楽科における反転学習の実践については、塚本伸一(2016)による東海大学付属小学校の事例が挙げられる。歌唱の学習において、反転・非反転授業を比較し、児童の思考を深める点で効果があったと述べている。

複式学級において学年別指導を行う際に、教師は片方の学年につかねばならない状況が生じる。あらかじめ、家庭において事前に動画や音声を視聴し、課題に対して取り組んでおくことが、複式学級における学びに有効に機能するのではないかと考えた。

4.2 仮説2 「共通導入・共通終末」を設定することで、直接指導の時間が増え、学習の充実が図れるのではないか。

学年別指導における「ずらし」と「わたり」を可能な限り解消するために、「共通導入・共通終末」を音楽科の学年別指導においても設定することで、教師が一人一人の児童へ直接指

導を行う時間が増え、学習の充実が図ることができると考えた。

5 検証方法と研究の概要

勤務校及びA小学校で行っている学年別指導は、表3⁷に表すような学年別指導の授業を行っていた。「ずらし」と「わたり」を授業内に設定して、直接指導と間接指導、場面によって同時間接指導を行う方式である。今回は、先に述べた仮説を検証するために、表4に示す授業を勤務校である長崎大学教育学部附属小学校の5・6年の複式学級（5年8名・6年7名）と、長崎県内の複式学級を有するA小学校（5年生1名・6年生6名）において、平成27年11月、12月に授業を行った。

両学年ともに「日本と世界の音楽に親しもう」という題材を設定し、本時では、第5学年は「声」によるアジアの音楽、第6学年は「楽器」によるアジアの音楽の鑑賞活動を行った。

今回の授業では、表4に示すように、反転学習を行うために、教師は事前に iTunes U⁸を用いて教材（鑑賞曲）を配布し、ダウンロードしたタブレットを児童は各家庭に持ち帰り、視聴できるように準備を行った。

「共通導入」では、「アジアの音楽を聴いて、それぞれの音楽のよさや特徴を紹介しよう」という目当てをたて、学年別指導を行い、共通終末ではそれぞれが聴き取った音楽のよさや特徴について紹介をしたり、自分のイメージマップを再構成したり、自分の聴き方の変化を振り返ったりする活動を行った。

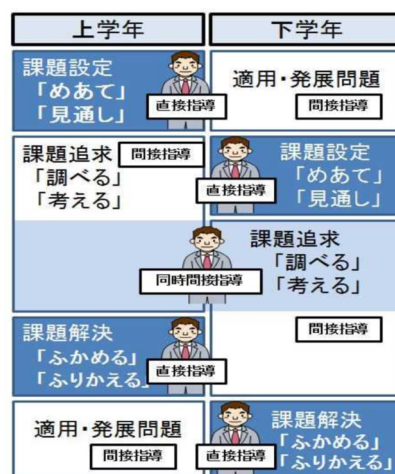


表3 学年別指導の授業モデル

	第5学年	第6学年
反転学習 (自宅)	声によるアジアの国々の音楽の音声を事前鑑賞 (①ケチャ②江差追分③ホーミー) イメージマップの作成	楽器によるアジアの国々の音楽の音声を事前鑑賞 (①ガムラン②雅楽③馬頭琴) イメージマップの作成
共通導入	目当てを立てる。 アジアの音楽を聴いて、それぞれの音楽のよさや特徴を紹介しよう。	
学年別 指導	グループによる視聴によるイメージマップの再構成（共通事項との関連） 「拍」に焦点化した鑑賞 各音楽の目的についての紹介	グループによる動画視聴によるイメージマップの再構成（共通事項との関連） 「音色」に焦点化した鑑賞 各音楽の目的についての紹介
共通終末	声や楽器による音楽のよさや特徴を他学年に紹介する。 自分のイメージマップの再構成 本時の振り返り（自分の聴き方の変化について発表）	

表4 反転学習及び「共通導入・共通終末」を取り入れた指導

⁷ 長崎大学教育学部附属小学校(2014)『平成25年度教育研究発表会研究紀要』において筆者が記載した複式指導資料より抜粋。

⁸ Apple が提供する教育用デジタルコンテンツ管理システム。コンテンツ配信、検索、ダウンロード、再生ができ教育者や学習者の学習環境をサポートする役割を担っており、無料である。

仮説1の検証については、児童への四件法によるアンケート、参観した教師へのインタビュー、児童のワークシートから検証し、考察する。仮説2の検証についても同様に、児童への四件法によるアンケート、参観した教師へのインタビュー、児童のワークシートから検証し、考察する。

6 仮説の検証と考察

6.1 児童へのアンケートの検証と考察

表5・表6で示すように勤務校における反転学習についての設問「タブレットを家で見てくることは効果があると思いますか」という問いに対し、勤務校及びA小学校において、全児童が効果あると回答した。理由についての自由記述を求めていたが、勤務校の児童において、「時間短縮になり、考える時間が増える」という内容の回答が多く、活動時間を普段の学習より多く取れていたことについてのよさを感じ取っていた。また、課題に対する個人での活動をあらかじめ家庭で行っていたため、「事前に学習ができて話し合いやすかった」「自分があらかじめ書いていたことが役に立つ」「すぐに活動に取り組める」など、グループでの他者との意見の共有にすぐに入ることができたと感じた児童が多かった。普段の学習において発表が少ない児童においては、自分の考えを持った状態で授業に参加することで「自分の考えを伝えやすかった」と指摘している。さらに、時間をおいて他者と共有する活動について、「昨日気付かなかった気付きが見つかるかもしれない」といった感想を持った児童もいた。

進んで学習に取り組むことができましたか？			
できた	ややできた	あまりできなかった	できなかった
13	2	0	0
友達と関わりながら取り組むことができましたか？			
できた	ややできた	あまりできなかった	できなかった
14	1	0	0
めあてを達成することができましたか？			
できた	ややできた	あまりできなかった	できなかった
15	0	0	0
聴く力はついたと思いますか？			
思う	やや思う	あまり思わない	思わない
11	4	0	0
タブレットを家で見てくることは効果があると思いますか？			
思う	やや思う	あまり思わない	思わない
13	2	0	0

進んで学習に取り組むことができましたか？			
できた	ややできた	あまりできなかった	できなかった
4	3	0	0
友達と関わりながら取り組むことができましたか？			
できた	ややできた	あまりできなかった	できなかった
2	3	1	1
めあてを達成することができましたか？			
できた	ややできた	あまりできなかった	できなかった
6	1	0	0
聴く力はついたと思いますか？			
思う	やや思う	あまり思わない	思わない
3	4	0	0
タブレットを家で見てくることは効果があると思いますか？			
思う	やや思う	あまり思わない	思わない
5	2	0	0

表5 勤務校のアンケートの結果(n=15)

表6 A小学校のアンケートの結果(n=7)

A小学校の児童は、タブレットを家で聴いてくることに対して、「家で何回も聴くことができる」「静かだから集中できる」「学校で聴く時間は限られているが、家では自分の時間がある」といった回答し、事前に鑑賞の活動を行うことのよさについての指摘があった。

アンケートの結果から、仮説1については、両学校のどちらの児童も有効性を感じていたと言える。

また、表5・表6の設問「めあてを達成することはできましたか」「聴く力はついたと思いますか」についても、全児童が肯定的な回答をしている。ただし、表2の「友達とかかわりながら学習に取り組めましたか」という質問に「できなかった」と答えたA小学校の1名に注

目したい。この児童は5年生の児童であり、学年別指導を行う上で、同学年の児童がいないため、教師との対話の中で自分の聴き方を変えていくことしかできず、6年生で行ったグループでの協同場面が設定できなかった。このように、学年の児童が1名の場合、年度方式であるならば、両学年で同じ教材での指導を行うことができるため、友達と対話しながら学習する場面は設定しやすいが、学年別指導の場合、「共通導入・共通終末」を設定したとしても、児童の学習への印象は協同して学習を行うことができないと感じていることが明らかになった。

6.2 参観者のインタビューの検証と考察

勤務校における授業を参観した校長からは、以下の指摘があった。

- 1) 反転学習及び「共通導入・共通終末」も有効に機能しており、通常の学年別指導で見られるような教師の負担感がないように感じた。
- 2) 反転学習の場合、通常の指導で行うように意欲を高めるような導入が難しいため、学習の目当てを設定するまでの、教師の工夫について検討が必要である。

参観した勤務校の音楽専科を担当しているT3教諭からは、「家庭で音楽を聴いて、自分の聴いて感じたことをイメージマップにまとめておくことで、一人一人が曲に対する考えを持って本時の学習に取り組んでいる姿がよく分かった。」と述べた。さらに、「類似する題材や教材を用いることで、「共通導入」で同じ目当てをたてたり、共通終末で互いに聴き取った音楽を紹介したりする活動を設定できることの良さを感じた。また、いつも行っている『わたり』や『ずらし』をなくすことで、ほぼ単式学級の授業と変わらない教師の動きや児童の活動に繋がっていた。」との感想があった。

A小学校の実践では5・6年生担任のT2教諭は、以下のよう指摘した。

- 1) 45分間、普段よりも集中して児童は学習に取り組めた（書くこと、聴くこと）。
- 2) 反転学習については、聴くことに興味を持って取り組んでいた。
- 3) 繰り返し聴いたり、必要に応じて音楽が取り出したりすることによさを感じた。
- 4) 「共通導入」については、2学年が同時に学習を進められる良さを感じた。
- 5) 全員が本時のめあてを達成したと評価した。
- 6) 他者と関わる中で、自分では気付かなかったことに気付く児童の姿があった。

一方、以下の課題を挙げている。

- 1) カリキュラムの組み合わせなどに大きな労力を割いているので、学年別指導やどのような教材の組み合わせが良いかについての何らかの指針となるものが欲しい。
- 2) 下学年は上学年の学習を先に触れることになるので、教材に出会う新鮮さが失われるのではないか。
- 3) 変則複式の場合はカリキュラム上、このような実践が可能かどうか疑問である。

以上の内容から、仮説1の反転学習の設定については、両校の教師共にその有効性を感じているのだが、本時で行う活動をあらかじめ家庭で行ってくるために、学習の動機付けをどのように行うかについての課題がある。

また、課題2については「共通導入・共通終末」を設定した授業モデルにおいて、「わたり」

と「ずらし」による教師の負担が軽減され、児童への直接指導の時間が確保できるが、T2教諭の指摘にあるようにどのような教材や題材を組み合わせる授業を行うかについての指針となるものがなければ、指導者がカリキュラムの編成作業を全て行う必要が出てくるため、このような実践は困難となる。

6.3 児童のワークシートの検証と考察

図1は勤務校の第5学年児童Aが家庭で作成したイメージマップである。強弱や速さ、反復といった共通事項で示されている音楽を形づくっている要素と関連しながら曲を聴くことができている。図2は、「共通終末」において本時で自分が学んだことを自分のイメージマップに太字で記入したものである。本時の学習では、まず、これまでに自分の聴き取りから感じ取っていた、強弱や速さ、反復といったことを友達と対話をしながら曲を聴いて確かめ、グループで1枚のイメージマップにまとめていた。その後、教師の直接指導において、「拍」に注目して鑑賞するように促したところ、《ケチャ》《南部牛追歌》《ホーミー》に合わせて、手拍子をしながら確かめ、それぞれの音楽の「拍」の有無を共有し、他学年に紹介を行った経験を自己のイメージマップにまとめることができたのである。



図1 児童Aの自宅での聴き取り



図2 児童Aの終末でのまとめ

図3は、A小学校の第6学年児童B、C、Dが家庭で書いてきたイメージマップを基に、曲を聴きながら作成したイメージマップである。

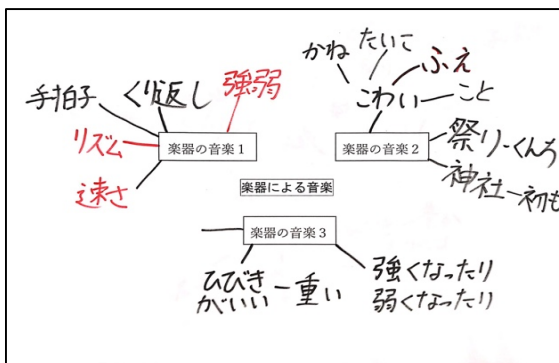


図3 児童BCDのグループでの聴き取り

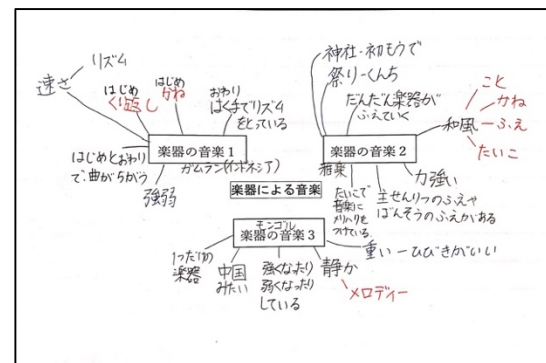


図4 児童Bの終末でのまとめ

児童Bは、速さや強弱の変化や旋律と伴奏に気を付けて自分のイメージマップを作成していたが、グループでの話し合いの中で、それぞれの音楽はどのような楽器が使われているのかということに焦点を当てて鑑賞を行ったため、《雅楽》で使われている音楽からは、「箏」「太鼓」「鉦」「笛」の音が聴こえてくることを聴取し、そのことを曲の紹介の場面で話をし、

最終的に自分のイメージマップに付け加えた。

以上の両校の児童の学習の姿から、仮説1の反転学習や、仮説2の「共通導入・共通終末」の設定が、本時の学習にとって有効であったと考えられる。

7 結論

以上の結果から、複式学級の音楽科指導における反転学習及び「共通導入・共通終末」の設定について、筆者自身、参観者及び児童もその有効性を共有することができたと思う。

しかし、文部省の指摘にあるように、同じ教室の中で異なる音楽がある状態は、課題がある場の設定であると考えられる。このような場で学習を成立するためには、児童自身が他グループの鑑賞活動に支障がないような音量調整を行ったり、話し合う際の声の大きさに配慮したりすることができなければならない。実際に、A小学校の授業実践において、筆者が直接指導を行っている中で、各グループの鑑賞する際の機器の音量を調整するという場面があった。その後、児童はタブレットを操作しながら聴きたい部分について繰り返し聴くことができていたものの、聴きたい音量で聴くことはできなかった。そのことを踏まえると、静かな環境でじっくりと対象の音楽を聴く事ができる場として、反転学習を行っておくことは鑑賞の活動において学年別指導を行う上で、一定の効果があったといえるだろう。

今回は鑑賞の活動であったが、器楽の活動においては、楽器の音量を調整しながら学習を進めることは、筆者の本年度の経験上、非常に困難であると感じている。また、少人数での演奏になるために、単式学級で行うような合奏指導に比べて、一人一人の演奏技能が求められると同時に、アンサンブルに必要な技能が求められる。さらに、今回のA小学校の第5学年の児童のように1名しか同学年にいない場合に合奏の授業そのものが成立しなくなるという課題が生じる。同様に、歌唱の活動（特に高学年の合唱指導）においても、同じような課題を抱えている。このような問題については、今回の実践とは異なる方法での授業を行う事が必要になってくる。

同じ題材を設定し、可能な限り類似する教材で学年別指導を行うことは、全く異なる題材や教材で指導を行うことに比べて、明らかに教師の授業の準備の負担や「わたり」や「ずらし」の計画を立てる負担が軽減され、年度別指導に近い感覚で授業を行うことができるよさがある。しかし、教師は上学年と下学年の年間指導計画を比較しながら、どのように教材を組み合わせ、題材を設定すればよいかを考え、複式学級用の年間指導計画を再構築しなければならない。これは、他教科の学年別指導においても同様であることから考えると、『小学校複式学級指導資料音楽編』に当たるような、複式学級用の年間指導計画の作成の指針となるものや、教科用図書に準拠した具体例が必要であると考えられる。

複式学級指導のよさの一つに、少人数であるために一人一人への充実した指導が単式学級に比べてできることが挙げられる。一方、より多くの友達の考えや意見に触れながら自分の考えを再構築することについては、単式学級に比べて困難であるといえよう。そのため、複式学級において学年別指導を行う際に、今回のA小学校のように学年の児童数が少ない場合については、この指導の方式は指導上の課題が多いと言えるだろう。

8 今後の展望

今回の研究では、鑑賞活動のみに焦点を当て、反転学習及び「共通導入・共通終末」を設定した授業モデルを実践してきた。

今後の研究として、複式学級の音楽科指導についての全国的な実態調査を行う必要があると考える。また、学年別指導と年度別指導についての各学校の選択の根拠は何であるかを明確にし、課題解決のための工夫や指導方法について調査したいと考える。

また、複式学級用の年間指導計画の作成が必要ではないかと考える。現在、小学校の音楽の教科用図書を作成している教育芸術社は、複式学級対応する指導計画は作成しているが一般的な公開はしていない。また、教育出版では、複式学級時数資料としてホームページ上で、低・中・高学年ごとに、年度別指導の年間指導計画資料を公開している。このような現状から、筆者は複式学級における音楽指導を行う年度別指導及び学年別指導に対応した年間指導計画についてのモデルを作成したいと考える。

今後、少子化や地域における児童数の減少により、複式学級が多くない都道府県にとって、複式教育の需要は増してくるものと考えられる。特に、離島やへき地を抱える県にとっては重要な課題となってくる。複式学級がある学校に赴任して初めて複式教育のことを知る教員や管理職も少なく無い。このような現状を考えると、国や県から複式学級の音楽科指導についての指針となる資料を作成・配布し、カリキュラム編成や指導の知識、方法について各学校の音楽科を指導する教員が十分に把握した上で、指導に当たる事が望ましいと考える。

【引用・参考文献】

岩手県教育委員会 (2006) 『岩手の小規模・複式指導ハンドブック-生活・音楽・図工・家庭・体育- (複式指導資料第 24 集)』.

岩手大学教育学部附属小学校教育研究会 (2014) 『学校公開研究会要項 未来を担う人間力をはぐくむ学びの創造 第 3 次』.

岩手県立総合教育センター (2015) 『複式学級の特質を生かした学習指導の進め方ガイド』

青森県教育委員会義務教育課 (2009) 『へき地・複式教育ハンドブック (一般編)』.

塚本伸一 (2016) 「音楽科における反転授業の一考察-言語活動の活発化と共通事項の定着を目指して-」 『学校音楽教育研究 20』 pp. 182-183, 日本学校音楽教育実践学会.

長崎県基本調査 (2017) 『小学校別学級数及び児童数』, <https://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2017/10/1509431641.pdf>, 2017. 12. 18 アクセス.

長崎大学教育学部附属小学校 (2014) 『平成 25 年度教育研究発表会研究紀要』

前田晶子 (2016) 「小規模化する小学校の課題と展望：鹿児島県における複式・少人数学級の調査報告」 『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 25』 pp. 311-316.

文部省 (1982) 『小学校複式学級指導資料音楽編』 ぎょうせい.

文部省 (1995) 『小学校複式学級指導資料音楽編』 教育芸術社.

山口亮介 (2010) 『複式学級対応年間指導計画資料 (小学校全学年カリキュラム案・学習案)』, http://www.kyogei.co.jp/data_room/nenkei/fukusiki23_a.html, 2017. 4. 1 アクセス.